私の読書スタイル 157

事実を探り当てて行動に活かす

株式会社リンク
代表取締役社長
岡田元治氏（五五）

会社は社会の中にあり

レンタルサーバーをはじめ、さまざまな業務を展開しているリンクの岡田元治さんは、株主利益優先の経営や派遣労働の蔓延などによって企業文化と社会が崩壊していくのを見て、利益のみを追求する企業社会のあり方に疑問を抱き、全社員正規雇用、出産・育児支援、変動定年制などを制度化した。

「会社は社会の中にあるのに、その社会を壊してどうする？　と思います。利益を極限まで追求する経営ではすべてが破綻します」

今年二月には、社内高齢化の受け皿と考える農系事業に進出。「寿命が延びすぎて、国も自治体も企業も立ち行かなくなってしまった。死ぬまで働かないといけない時代が迫り来る中、余裕のあるうちに選択的な出口労働の準備をしておこうと考えたわけです」

こうした発想も「読書のお陰」だと言う。

ちょうど五年前、新宿の沖縄料理バーでたまたま隣に座った男性から〝現天皇家南朝説〟の本を教えてもらった。幕末維新の傍証を調べ上げたらしい内容で、かなりの読み応え。かつては推理小説や司馬遼太郎、著名な言論人の著作などを読んでいたが、以降、事実系の本を読み進み、最近は、事実に触れようとしない定説本が読めなくなったという。

「インターネットの商用解放から二十年。情報のパンドラボックスが開いたことで、人類史上初めて事実、真実がわれわれ大衆の前に現れるようになりました。嘘を垂れ流す大手メディアと書き手を離れ、自分の眼で優れた書き手が選べるいい時代になったと思います」

種々のテーマを書物やネット情報で検証して事実の追究を試みる。既存のメディアは社会を立体的に見るためにだけ読む。そんな日常から、読み応え本を紹介してもらおう。

米欧プロパガンダの勝利

宋鴻兵『**ロスチャイルド、通貨強奪の歴史とそのシナリオ**』（武田ランダムハウスジャパン）――「中国で百五十万部を売った話題作で、原題は『通貨戦争』。一九六八年四川省生まれの著者は、アメリカの大学で修士号を取得。ファニーメイなどでコンサルタント業務に就いた後、二〇〇八年から中国で環球経済研究院院長を務めています。米国政府が国際金融資本に負けた百五十年の歴史を調べ尽くした著者の自国政府への提言は痛切で、政府が調査を命じたのではないか、とさえ思えます。中国政府関係者がこれを読んだ上で米中戦略対話に臨んでいることを思うと、なかなか痛快。金融人のみならず、現代を生きるすべての人に読んでもらいたい一冊です」

松原久子『**驕れる白人と闘うための日本近代史**』（文藝春秋）――「一九五八年に国際基督教大学を卒業した著者の米国・西独在住経験に基づく言挙げの書。原著は欧米史観一辺倒の世界と日本に警鐘を鳴らすべく、八九年にドイツで出版。愚策としての鎖国、輝かしい明治の文明開化と教えられて民主主義の昭和を生きてきた私には衝撃でした。渡部悌治『**ユダヤは日本に何をしたか**』もお薦めです」

鈴木猛夫『**「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活**』（藤原書店）――「〝ごはんは頭に悪い〟というキャラバンカーの声を聞いた五十年前の記憶が蘇りました。著者は『人類史上これほど短期間に食生活が変わった国はない』と嘆きます。消えた玄米・白米論争、現代栄養学の嘘などの話は驚きです」

ジョン・G・ロバーツ＋グレン・デイビス『**軍隊なき占領**』（講談社＋α文庫）――「日本は、占領終結後も外交・防衛・内政のすべてが米国の指導下で行われることになっていたといいます。七年の占領期間を経て一九五二年に独立したと教えられてきた日本が、実はまだ占領下にあるという哀しい現実を突きつけられます。前掲書と共に米国の立案実行能力の凄さを改めて実感させられました」

事実は消えずに伝播する

藤田幸久・きくちゆみ・童子丸開ほか『**9・11テロ疑惑国会追及**』（クラブハウス）――「9・11疑惑を取り上げた本は日本でも四十冊前後出版されていますが、著者の一人である藤田氏は、〇八年に現職国会議員として世界で初めて国会質問を行ったことで賞賛に値します。共著者のきくち氏が森田玄氏と共に解説をした『**テロリストは誰？**』と併せ読むと、事件が陰謀論でも何でもない現実の闇であることが理解できます」

田中宇『**仕組まれた9・11**』（PHP研究所）――「人気メルマガの発行人である著者が9・11のわずか半年後に書いた力作。事件の二日後に『ビンラディンが犯人だという米政府の筋書きに飛びつくのは危険』と書き切った眼力は凄い。氏の『**メディアが出さないほんとうの話**』『**米中逆転**』もお薦めです」

角田四郎『**疑惑　JAL123便墜落事故**』（早稲田出版）――「原因が偶発的であったらしいことに多少の救いはあるものの、巨大な隠蔽は現代日本にも存在するという事実を突きつけられました。多くの関係者が気づいているにもかかわらず、毎年八月十二日に流れる『問われる空の安全』という文句が空々しく哀しいですね」

世川行介『**泣かない小沢一郎が憎らしい**』（同時代社）――「『この国の秩序の埒外を生きている』と自らを語る著者が、羽田攻をはじめとする盟友の言葉を借りつつ小沢一郎の連戦連敗の二十年を綴る。『小沢を社会的に抹殺しようとまで憎む者たちは何者なのだろう』という著者の嘆きは、十七年来の小沢支持者である私自身の嘆きでもあります。常に小沢抗力でしか動かないこの国の政治と報道、報道という名のキャンペーンに誘導され続ける世論、法治国家という名の〝法暴力〟国家には慨嘆せざるをえません」

副島隆彦ほか『**日本の真実**』（成甲書房）――「毀誉褒貶の激しい著者ですが、〇七年三月の段階で『次の大統領はオバマ』と言い切った切れのいい書きっぷりにファンも多いようです。〝捕鯨禁止は軍事問題〟という論文をはじめ、表では語られない事実の連続は驚き。前掲書『軍隊なき占領』も氏の代表的な著作である『**日本の秘密**』で知りました」

中洞正『**幸せな牛からおいしい牛乳**』（コモンズ）――「農系事業進出のきっかけとなった本で、日本に素晴らしい酪農手法が存在することを教えられました。その後、木村秋則著『**リンゴが教えてくれたこと**』、赤峰勝人著『**ニンジンの奇跡**』、河名秀郎著『**自然の野菜は腐らない**』と読み進んで、日本の農業が変化・再生しつつあるのを実感しました」

忰山紀一『**よみがえる千島学説**』（なずなワールド）――「腸造血、細胞非分裂、輸血の危険性等、西洋医学者を怒らせる話の連続ですが、専門外の私にはすんなり読めました。行き詰まった現代医学を救うという意味でノーベル賞をはるかに超えるレベルの研究だと思う一方で、医学界としては無視せざるをえない理由も理解できます。これを認めたら現代医学が根底から覆り、巨大な業界組織が維持できなくなるでしょうから」

若者の読書は読み肥やしでいいが、残り時間がそう多くない年齢になったら本で得た知識を基に行動しないともったいないと言う。映画『ZERO』を配給したのもその一環だった。

●岡田元治さんの最近の読み応え本●

『ロスチャイルド、通貨強奪の歴史とそのシナリオ』宋鴻兵／武田ランダムハウスジャパン
『驕れる白人と闘うための日本近代史』松原久子／文藝春秋
『「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活』鈴木猛夫／藤原書店
『軍隊なき占領』ジョン・G・ロバーツ＋グレン・デイビス／講談社＋α文庫
『9・11テロ疑惑国会追及』藤田幸久、童子丸開、きくちゆみ他／クラブハウス
『仕組まれた9・11』田中宇／PHP研究所
『疑惑JAL123便墜落事故』角田四郎／早稲田出版
『泣かない小沢一郎が憎らしい』世川行介／同時代社
『日本の真実』副島隆彦編著／成甲書房
『幸せな牛からおいしい牛乳』中洞正／コモンズ
『よみがえる千島学説』忰山紀一／なずなワールド

【愛読ブログ】
田中宇（さかい）の国際ニュース解説
植草一秀の『知られざる真実』
岩上安身オフィシャルサイト